

1. 流域の変遷

1-1 流域の概況

沙流川は、日高山脈の日勝峠付近に源を発し、ほぼ南西方向に流下している。途中、芽室岳(1,745m)、ルベシベ岳(1,740m)、チロ口岳(1,880m)、ピハイ口岳(1,917m)等に源を発するウェンザル川、ペンケヌシ川、パンケヌシ川、千呂露川等と合流し日高町に至る。さらに戸蔦別岳(1,960m)、幌尻岳(2,052m)に源を発する額平川等の支川と合流し、平取町を経て門別富川にて太平洋に注ぐ流域面積は1,350km²、幹川流路延長は104kmの一級河川である。

流域内市町村は日高支庁の日高町、平取町、門別町の3町にまたがっている。

1-2 沙流川の由来と歴史

沙流川は、その原名を「シシリムカ」と言って、「満潮毎に集まる砂が多くて、その河口がふさがって高台になっている」という意味であるが、沙流川流域はアイヌ民族の「サル・ウン・クル」(葦原・住む・人々)一族の中心地であり、その後の郡制時代には「沙流郡」といったことなどから「サル」がそのまま使われるようになったと言われている。

流域は、先史時代から人々の生活の足跡を残し、アイヌ文化の時代にあっては道内で有数のコタン(集落)を形成し、また、サルウングル一族の舞台となっていた。このアイヌ民族の伝統・文化は今日の流域社会に深く結びついており、チプサンケ、ユーカラ、アイヌ古式舞踊などが今日まで受け継がれている。

道内では比較的気候温暖で林産資源に恵まれ、下流部は沃野を形成して農耕地として明治初期からひらけ水田、牧畜等が営まれ発展してきた。近年は軽種馬の産地として有名で、全国軽種馬生産頭数の約80パーセントを占める日高支庁の一翼を担っている。

現在、農用地の拡大造成、総合観光開発の推進、地場産業の育成、生活環境の整備など21世紀に向けた地域の自立活性化方策が図られている。また、苫小牧東部地区、新千歳空港から近く、建設中の高規格道路と連携し日高圏内の産業発展のため重要な地域である。

